

ラームモーハン・ローイの藍プランテーション認識

—19世紀ベンガルにおける近代化の一側面—

佐々木 良己子

はじめに

イギリス東インド会社はカルカッタを拠点に各地の地方政権を征服・併合し、19世紀半ばまでにはインド全域を支配下に置いた。ベンガルはイギリスによる支配の影響を最も強く受けた地域であり、植民地財政を支える商品作物の生産・輸出を担った地域である。なかでも藍プランテーションは、インドからイギリス本国への送金手段としての必要から1780年代以降にベンガルに導入された。藍は1820年代にはインドからの英国向け輸出品において重要な位置を占めたものの、植民地支配体制の変化とともに1830年代にはその重要性を低下させた。中里成章によれば、藍の輸出品としての地位はインド国内市場の統一と、イギリス資本に対する市場の開放の促進、またアヘンや茶のような新しい商品の重要性の上昇によって相対的に低下したという⁽¹⁾。

また、ベンガルはイギリス支配によって「近代的な」教育を受けたインド人「中間層」が生まれた地域でもある。このような新しい知識階級の一人がラームモーハン・ローイ(Rammohun Roy, 1774-1833)⁽²⁾であり、彼はインドの社会・宗教改革に取り組んだことから、しばしば「近代インドの父」と称される。ローイは1822年に「藍プランターは、ベンガルの人々に、ほかの階級の人々がもたらすよりも重要な商品をもたらした⁽³⁾」と述べているが、ローイと藍プランテーションとを関連付けた研究は、管見の限りではスパーズ・バッタチャルヤ(Subbhas Bhattacharya)の論文だけである。1780年代以降にベンガルで藍プランテーションが形成されていく過程と、ローイによるインドの「近代化」のための活動は時期を同じくしている。本稿ではインド社会経済史研究において議論されてきた「18世紀問題」および世界史的課題であるナショナリズム論を援用し、ローイが藍プランテーションをどのように認識していたのか、またその認識はどのような背景によって形成されたのかということをも明らかにしたい⁽⁴⁾。

第1章 ラームモーハン・ローイの藍プランテーション認識

第1節 ラームモーハン・ローイの生涯におけるイギリスとの関係

ローイは1803年から1815年までイギリス東インド会社の地方官吏として働いていた。竹内啓二によれば、ローイがイギリス東インド会社に勤めた真の目的は、英語を学びイギリス人の性格を知ることであった⁽⁵⁾。ローイはイギリス人の上司から彼自身の働きや能力を正当に評価されるという経験を得たことで、その後イギリスに好意的ともいえる態度をとるようになったのではないだろうか。

イギリス東インド会社退職以後、ローイは様々な社会改革運動を行うが、なかでもサティーの廃止運動に大きな影響を及ぼした。サティーとは、「ヒンドゥー教徒の古い慣習で、寡婦が夫の火葬のときいっしょに生きながら焼かれ葬られること、あるいはその後の殉死」を指し、「サティーによって家族の宗教的な罪が減するとその功德がたたえられたが、現実には戦士階級の倫理、女の地位の低下、寡婦の生活のみじめさがこの慣習を助長したのであって、寡婦の自発的行為だけでなく、親族の強要もあり、薬物も使用された」⁽⁶⁾。ローイはサティーのようなインド国内における課題をイギリスの力を借りることで解決しようとした一方で、新聞の検閲や出版停止をイギリス側に押し付けられたときには、インド人の権利を守るために強く反対した。ローイの活動は単にヨーロッパ的な価値観を肯定し、流用することにあつたのではなく、ヒンドゥー教の聖典に基づいて信仰の問題点を改め、ヨーロッパの良いところを取り入れることで、人々の生活を向上させようとしたところに大きな特徴があるのではないだろうか。

ローイは1830年11月19日にカルカッタを出発し、翌1831年4月8日にリヴァプールに到着した。彼の渡英の目的は、第一にアクバル2世（在位1806-1837）の年金増額交渉、第二にサティー禁止条例制定に対する保守派の撤廃運動の却下を求めること、そして第三に1833年に控えたイギリス東インド会社特許状更新に伴うインド問題の論議にあたり、イギリス側にインドの状況改善を訴えることであつた。ローイはイギリス議会上院の特別小委員会に召喚され、司法・徴税両制度について質疑応答形式のレポートを提出した。ローイのイギリス滞在中には、質疑応答のほかに、ヨーロッパ人のインド定住に関するレポートも書かれている。山崎利男によれば、ローイがイギリスによるインドの植民地支配について直接的に論じたのはこの時期に限られているという⁽⁷⁾。

白田雅之は「インドの宗教／非宗教領域」という視点で、「非宗教的な」領域がイギリスに支配されていたベンガルにおいて、当時のインド人が意見を述べたり行動を起こしたりできるのは「宗教的な」領域においてのみであつたと説明している⁽⁸⁾。つまり、ローイの生涯において活動の大半を占めた宗教改革は、当時のベンガル人に許された範囲での活動であつた。ローイは宗教的な問題に対して出版や法廷闘争、請願という非宗教的な手段をとったが、中里が指

摘するように、このことは本来であればイギリス人が関与できないはずの「宗教」領域にイギリス人が介入する端緒となったのである⁽⁹⁾。インド社会の状況を改善するためにイギリスの力を利用するというローイの立場は、本稿で考察する藍プランテーションやヨーロッパ人定住の問題にも共通してみられる特徴である。そして渡英以後、ローイは非宗教領域の問題にインド人として取り組み、対処しようとしたのである。ローイはイギリスが宗教領域に介入し始めた時期と、インド人が非宗教領域で活動するようになった時期との起点にいたのではないだろうかと筆者は考える。

第2節 イギリス支配に対する意見

ローイはしばしばイギリスによるインドの植民地支配を好意的に捉えており、イギリスに協力的であったとさえ評されることがある。山崎は、ローイが1831年9月19日にインド庁に提出した「インドの司法制度に関する質疑応答 Questions and Answers on the Judicial System of India」を検討したうえで、ローイがイギリス支配下においてインドの諸状況を改善しながら、徐々にインド人の政治的権利を伸張し、インド人の威信を高めることを目指していたと指摘している⁽¹⁰⁾。

ローイはイギリスによる支配をどのように認識していたのか。また、なぜ支配を受け入れていたのだろうか。ローイはイギリス滞在中の1831年から1832年にかけて、イギリスによるインド支配についての意見を残している。ローイはインド庁とインドの概況や徴税・司法両制度に関する質疑応答を行い、彼の提出した回答は *The English Works of Raja Rammohun Roy, Part 3*⁽¹¹⁾ に収められている。本稿では、そのなかの「インドにおける租税収入についての質問と回答 Questions and Answers on the Revenue System of India」, 「インドにおける租税収入についてのレポート Paper on the Revenue System of India」, 「インドの状況に関する追加質問 Additional Questions Respecting the Condition of India」, 「ヨーロッパ人のインド定住についての所見 Remarks on Settlement in India by Europeans」を参照する。

「インドの状況に関する追加質問」では、インド人がイギリスによる支配をどのように受け止めているのかという質問に対する回答がなされている⁽¹²⁾。(以下、[] 内筆者加筆)

インド庁の質問 13: 現地人 [インド人] やヨーロッパ人で構成された政府とその行政官の、従来の組織形態に関する現地住民の一般的な意見は何ですか？

ローイの回答 13: 国内の農民や村人はそれについてほとんど何も知りません。また以前の支配者 [ムガル帝国] についても現在の支配者 [イギリス植民地政府] についても無関心です。彼らは享受できるであろう保護や、苦しむであろう抑圧を、彼らをすぐ近くで管理する公職者の行いに起因するものだとしています。しかし、貿易に従事している人々の

多くや、永代ザミンダーリー制によって私有地の平和的な所有が保障されている人々の多く、またイギリス支配下に存在する、将来的な向上の可能性を予見するのに十分な知性をもっている人々は、イギリス支配を承諾するだけでなく、インドに対する恩恵のように考えています。

この質疑において、農民や村人は支配者がインド人でもイギリス人でも関心を持たないが、イギリスと直接的なかかわりのある人々は、イギリスの支配を承諾するだけでなく恩恵のように考えていると説明される。成功したザミンダールであり、ヨーロッパの学問を享受した知識人であるローイは後者の人間に含まれる。つまり、ローイはイギリス支配を受け入れていただけでなく、インドの利益のように考えていたのではないだろうかと筆者は考える。

ローイはなぜイギリスによる支配を好意的に受け止めていたのだろうか。ローイはしばしば、以前の統治者であったムガル帝国の統治体制に対する不満を述べており、ムガル帝国とイギリスとを比較していたように思われる。例えば、「インドの状況に関する追加質問」には次のような回答が見られる⁽¹³⁾。

質問 10：現地住民のなかで、知識人はどのくらい存在しますか？

回答 10：インドは非常に長い期間、ヒンドゥーの学問にほとんど敬意を示さないムスリム統治者の独裁的な軍事政権に従属してきたので、デカンの一部地域やインド東部のようなムスリム政権の主要地域から遠く離れたところにいるバラモンを除いて、知識人層は大きく減退しており、それどころかほとんど消滅してしまいました。[中略] サンスクリット文学を修めた人々や、アラビア語やペルシア語の学問を享受した人々のなかで、多くの博識で啓発された知識人が見出されるかもしれません。しかし、ヨーロッパの学問への無知のために、彼ら知識人はアラビア語やサンスクリット語に精通していないようなヨーロッパ人には当然評価されません。

この質疑において、ローイはムガル帝国を「ムスリム統治者の独裁的な軍事政権」と評し、ムガル帝国がヒンドゥーの知識人を正しく評価しなかったと批判的に捉えていることが読み取れる。また、インドの知識人がヨーロッパ人から評価を得るには、西洋の学問を修める必要があることを示している。

以上の記述から、ローイは単にイギリスによる支配を受け入れていたのではなく、ムガル帝国との比較を行うことで、イギリス支配を妥当だと考えていたのではないかと筆者は推測する。

第3節 ヨーロッパ人のインド定住に対する意見

ローイは「インドにおける租税収入についての質問と回答」におけるインド庁との質疑のなかで、ヨーロッパ人のインド定住について以下のようなやり取りをしている⁽¹⁴⁾。

質問 48：ヨーロッパ人の資本家が不動産を購入して、彼らが同物件に定住することを許可するのは有害ですか？それとも有益ですか？

回答 48：もし品性が優れた資本家のヨーロッパ人がインドに定住することを承認されたとしたら、優れた栽培方法や、労働者とその家族を待遇する適切な方法をインド人に教えることによって、インドの財源を増大し、インド人の境遇を大いに改善するでしょう。

質問 52：インドにおけるヨーロッパ人資本家の大規模な定住は、インドの資源をどのように向上させますか？

回答 52：インドで見出された富とともにヨーロッパ人がインドから撤退しているために、莫大な金額の富が毎年インドから流出しているの、ヨーロッパ人資本家をその家族とともに永住者になるように奨励する制度は、必然的にインドの資源を大幅に向上させるでしょう。

ここでローイは、品性が優れ、資本を所有し、先進的な農業技術などをインドに伝えることができるという条件を提示したうえで、この条件を満たす限りにおいてヨーロッパ人のインド定住を有益なものとしなしている。また、ローイはインドの富の流出を防止するという観点からもヨーロッパ人資本家とその家族の定住を奨励している。ローイは「ヨーロッパ人のインド定住についての所見」において定住に関する短所を挙げ、より具体的にヨーロッパ人定住者の条件を提案している。以下は筆者による要約である⁽¹⁵⁾。

短所：支配階級に属するヨーロッパ人定住者は、土着の民族を支配することを当然であると決めてかかったり、独占的な権利や特権を享受しようとしたりするかもしれない。また、信仰や肌の色、習慣の違いから、現地人の感情を傷つけたり、彼らを侮辱したりするかもしれない。

提案：品位が高く、教育を受けた階級のヨーロッパ人は、より低い階級の人々に比べて現地住民に不愉快なことをしたり侮辱したりする傾向にはほとんどないと知られているので、少なくともはじめの20年間は、教養と資本のあるヨーロッパ人が定住するべきである。

ここでは、ローイは20年間という具体的な期間を示して、インド人とヨーロッパ人との間

に対立が生じることを防止しようとしていることがわかる。以上、ローイの発言に表れているように、彼はヨーロッパ人に一定の条件を課したうえでインドへの定住を奨励しており、単にヨーロッパ人を全面的に支持し、あらゆる人々の定住を促したのではなかったということがわかる。また、同じく定住に関する短所のなかで、ヨーロッパ人定住者が増加し、インドの人々の富や知性、公共心の水準が向上すると、アメリカのようにインドも独立を目指すのではないかという懸念に対して、ローイは「インド人が寛大に扱われていて、啓蒙された方法で統治されている限りは、カナダと同様に、両国に対する相互的な利益が維持されるかもしれないイギリスとのつながりを絶つ気はないだろう⁽¹⁶⁾」と推測している。この記述からも、イギリスによる支配を全面的に肯定していたのではなく、寛大で啓蒙的な統治を望み、インドとイギリスの両国に利益のある関係を願っていたということがわかる。

ローイはヨーロッパ人のインド定住について、その長所は彼らの農業に関する知識や技術によってインド人が利益を得ることにあると説明している⁽¹⁷⁾。また、インドは無制限にイギリス支配による利益を享受する代わりにイギリスに貢献すると述べたうえで、以下のことを主張する。「すなわち、あらゆる地方の制限や追放の責なしに、政府の自由裁量で、人格 [に優れ]、資本 [があり]、教養のある人々は、今やインドに定住することを許可され、奨励されるべきであると私は不安なく勧めるでしょう。そして、この試みの結果が、この [ヨーロッパ人のインド定住] に関する将来の立法における指針として役に立つかもしれません⁽¹⁸⁾。」つまり、ローイがヨーロッパ人の定住を奨励した目的はあくまでもインド社会の向上であり、イギリス支配を無批判に受け入れたのではないという点が重要だと筆者は考える。

第4節 藍プランテーションに対する意見

ローイが藍について触れる回数は多くないが、彼は藍を重要な商品であると認識していた。例えば、「ヨーロッパ人のインド定住についての所見」のなかで、「ヨーロッパ人のインド定住者は、彼らが持つ土壌を耕す優れた方法の知識を伝えるでしょう。また、生産物（例えば砂糖という商品）の改善は、インディゴに関してはすでに生じており、機械技術や農業、貿易システムの向上も広く [生じています]。もちろん、それによって現地住民は利益を得るでしょう⁽¹⁹⁾。」と述べている。つまりローイは、ヨーロッパ人の知識によって藍の品質が改善され、利益を生み出す商品になると考えていたのである。コレット (Sophia Dobson Collet) はローイについての伝記のなかで、ローイが発行していた週刊紙『知識の月光』の1822年の記事を取り上げ、藍プランテーションは荒蕪地を耕作地に変え、下層階級を豊かにした、とローイが指摘したと述べている⁽²⁰⁾。

ローイの藍プランテーションに関する意見は、彼が1829年11月12日にカルカッタの有名なイギリス商社の社長であるナタニエル・アレクサンダー (Nathaniel Alexander)⁽²¹⁾に宛てた

手紙からも読み取ることができる。

「上昇した藍の価格と、多くの点で、以前よりも良い相場であるがために、ほとんどの製造工場が増加した藍プランターによって、農民に用意された前貸金は、その苗に当てられる。…私にははっきりとした考えがある。つまり、概して藍プランターは、ベンガルの現地に、他の階級の人々がもたらすよりも、より重要な商品をもたらした、という考えである。これは、私がインドとヨーロッパの両方で、そのテーマについていつ問われるとしても、断言することを躊躇しないであろう事実である。(中略)もし、国を追い出された藍プランターを、なんらかの階級の現地人が喜んで見送るのなら、その階級はたいていザミーンダールであるだろう。なぜなら、多くの例において、地主の横暴や抑圧に対して、プランターは農民をうまく保護していたからである⁽²²⁾。」

この手紙には藍が重要な商品であるというローイの意見がはっきりと表れている。また、ローイは、藍プランターが農民を搾取しているのではなく、ザミーンダールの横暴から農民をかばう役割を担っており、ザミーンダールは藍プランターの存在を疎ましいと思っている、と理解していたことが読み取れる。

以上の記述から、ローイは藍プランターがベンガルにもたらした栽培の知識や技術を好意的に捉えており、藍の栽培によって農民およびベンガルの土地や経済が豊かになったと考えていたのではないだろうかと筆者は考察する。

第2章 ラームモーハン・ローイの藍プランテーション認識が形成された背景

第1節 社会経済史におけるラームモーハン・ローイ

ローイはインド社会の利益のために、イギリスによる支配やヨーロッパ人の定住を好意的に受け止めていた。また、ローイは藍プランテーションについてもインドに利益をもたらす重要なものであると考えていた。一方で、岡倉古志郎によれば1801年にはすでに藍プランターの暴虐行為を抑止するための案が作成されており、1810年には暴虐行為のゆえに追放された藍プランターが存在したという⁽²³⁾。ローイがイギリスによる支配や藍プランテーションについて意見を述べた1822年から1832年には、すでに藍プランターは農民に無理な耕作を強いており、藍作農民が利益を得ていたとは言い難い状況であった。ローイは農民とプランターとの対立を認識していなかったのだろうか。コレットはローイの伝記のなかで、「ベンガルの藍プランターに対して、より基本的なナショナリズムの動向である激しい抗議がなされたために、ラームモーハンは臆することなく、中傷されたヨーロッパ人の弁護者となった⁽²⁴⁾」と述べている。つまり、コレットはローイがヨーロッパ人藍プランターの味方であったと説明しているのである。コレットのように、ローイが藍プランターの味方であったとはいえ植民地主義者ではなかつ

たと主張する人々は、ローイが生きていた時代をその理由に挙げるとバッタチャルヤは説明している⁽²⁵⁾。ローイの弁護者たちは、ローイの時代において藍プランテーションの抑圧的な側面はそれほど顕著ではなく、抑圧の事例は極めてまれでよく知られていなかったと説明し、藍プランテーションは伝統的な農業から発展した動きであり、農民に物質的な向上をもたらすとみなされていたと説明するという。

しかしバッタチャルヤは、「インドの貧しい農民に大きな愛情を持っているとは思われていなかった⁽²⁶⁾」植民地主義者のマコーレー（Thomas Babington Macaulay）⁽²⁷⁾でさえ、1835年には農民は奴隷制に近い状態にあり、藍プランテーションは農民にとって事実上利益がなかったと懸念していたと説明している。そのためバッタチャルヤは、ローイの時代にはすでに藍プランテーションに問題が生じていたと主張している。また、ローイは農民からの強奪によって豊かになった地主階級に属していただけでなく、彼らの代弁者でもあったため、特権階級の利害を無視することがいつも可能であるわけではなかった点にも注目している。そのうえでバッタチャルヤは、ローイは彼の時代に最も「近代的な」人物であったにもかかわらず、凶らずもインドにおける藍プランターとヨーロッパ人入植者の弁護に陥っていたと指摘している⁽²⁸⁾。

ベンガルにおける藍プランテーションは1780年に導入されるが、ベンガルの経済発展を意図したものではなく、イギリス本国への送金手段にする目的でイギリス東インド会社によって導入されたという点で、前植民地期との継続性がなかった。一方で、藍プランテーションは、価格面では1825年のロンドン価格を頂点として、生産量では1840年代を頂点として衰退していくことになる。このような藍プランテーションの衰退は、1830年代以降の植民地政策の変化に伴うものであり、つまり1830年代を「長期の18世紀」の終焉であったとみなす連続説に当てはめることができると筆者は考える。このように、藍プランテーションの導入には断絶説を、藍プランテーションの衰退には連続説を当てはめることができるのである。そもそも藍プランテーションが近代的なプランテーションではないと考えるとき、近世から近代への移行期の初期に導入され、本格的な近代化に対応することができなかった産業であると理解することができるのではないだろうか。

筆者はイギリス東インド会社による直接統治が始まった18世紀半ばから、インドがイギリス本国の統治下に入る19世紀半ばまでを近世から近代への移行期とみなし、なかでも1830年代を境に植民地支配の性質が大きく変化していったのではないかと考える。藍プランテーションは植民地支配がなければ生じ得ないが、その開始が直ちに近代の始まりであるとは言えず、グラデーションのように近代化していったのではないだろうか。つまり、ローイの藍プランテーション認識がなされた1822年から1832年という時代は、近世から近代への移行期であると同時に、近代化のスピードが加速する直前の時期であったのではないかと筆者は考える。ローイがヨーロッパ人の定住を肯定したのはインドの利益のためであった。それと同様に、ローイが

藍プランテーションや藍プランターを好意的に評価したのは、それらがインドの利益になるという考えに由来すると思われる。ローイが藍について発言した時期に藍の栽培や輸出が好調だったのであれば、ローイが藍を利益のある商品だとみなしたのは当然である。ローイの目的、すなわちインドの社会・経済の向上を望むのであれば、結果的に植民地政府にとって都合の良い立場になってしまったとしても、ローイの藍プランテーション認識は論理的であったと筆者は考える。

第2節 インド・ナショナリズム史におけるラームモーハン・ローイ

ローイはインド・ナショナリズムの萌芽と結び付けられて語られる人物である。本稿ではローイがインド・ナショナリズムに果たした役割を検討する余裕がなかったが、中里による説明をもとに、ローイがインド・ナショナリズム成立過程のどのような時期に位置していたのかということ考察したい。

中里によれば、一般的に、1870年代から1880年代にかけての時期にインド・ナショナリズムが興起したと説明されるという。この時期に、1876年にはインド国民会議派の前身であるインド協会が発足し、1885年にはインド国民会議派が創設された。1857年の大学設置を転換点に英語が普及し、英語教育を受けた中間層がまとまった社会層として登場したのが1870年代であったという。ゆえに、中里はインド・ナショナリズムの前史を1870年代以前であるとしている。インドは18世紀半ばに植民地化されたものの、産業化や近代化が遅れたため、意識と社会との間に極端な偏りがあった。このようなインド社会において、古くからある集団的な帰属意識である「プロト・ナショナリズム」から「ナショナリズム」への移行は、1830年代から1860年代に生じたと中里は説明している。中里はこの移行期を「過渡期」と呼び、プロト・ナショナリズムからナショナリズムへの過渡期は、「西欧の衝撃」を反芻する時期であったとしている。中里は、ローイを1810年代から1820年代の思想的高揚期に位置づけ、ヨーロッパへの直線的な共感と信頼の時代がローイの死とともに終わると説明している⁽²⁹⁾。

中里の説明によれば、ローイは「プロト・ナショナリズム」の時代を生きていた。それと同時にローイはヨーロッパへの共感と信頼を抱いていた時代に生きており、彼の死とともにそのような時代が終焉を迎えたという。このことから、ローイの藍プランテーション認識についてはイギリス支配への好意的な態度が、ナショナリズム以前の時期であったからこそ可能であったと筆者は考える。ローイ以降の歴史を踏まえて彼を評価すれば、ある面で植民地協力者の性格があるのは確かだが、ローイの時代においては、ヨーロッパの新しい価値観を取り入れることでインドの状況を改善しようとした人物であると評価できるのではないだろうか。

おわりに

ローイの藍プランテーション認識は、社会経済史的には近世から近代への移行期に、とりわけ近代化のスピードが加速する直前の時期に形成され、インド・ナショナリズムの成立史的にはプロト・ナショナリズムからナショナリズムへの過渡期の直前に形成された。ローイは近代化が加速する直前の、近世から近代への移行期に活動し、それゆえイギリスの植民地支配に協力的な態度をとったのである。ローイが「近代インドの父」と評価されるのは、インド社会が近代に至るための課題を世間に提示し、その第一歩を踏み出したということに基づくのではないだろうか。ローイひとりがインドを近代に導いたということは当然できず、その一方で、彼がイギリスの植民地支配を称賛し、全面的に肯定したと評価することもまたできないと筆者は考える。

ローイと藍プランテーションとを論じた研究が一つしかなかったことから、本稿では藍プランテーションに焦点を絞って考察を行った。しかし、研究を進めるなかで、ローイと藍プランテーションとを関連付けた研究が少ないのは、ローイによる藍プランテーションへの言及がほとんどなされていないという理由によることがわかった。今後はむしろ、19世紀前半のベンガルにおけるザミンダールとしてのローイに注目し、ローイがザミンダールとして藍プランテーション、ひいてはイギリスによる植民地支配をどのように評価していたのかという議論に発展させる必要があるだろう。本稿では藍プランテーションに関する史資料を十分に活用できたとは言いがたいため、「藍プランテーション」という言葉についての考察とともに、今後の課題としたい。

注

- (1) 中里成章 (1981) 「ベンガル藍一揆をめぐって (1) : イギリス植民地主義とベンガル農民」『東洋文化研究所紀要』83, p. 119.
- (2) ローイの生誕年には1772年説もあるが、山崎利男が参照した R. C. Majumdar の論文に基づき、本稿では1774年説を採用する。R. C. Majumdar (1972). "The Date of the Birth of Raja Rammohan Roy". *On Rammohan Roy*, Calcutta: The Asiatic Society, pp. 3-18; 山崎利男 (1974) 「ラームモーハン＝ローイの司法制度論 (1)」『東洋文化研究所紀要』64, p. 85.
- (3) Collet, S. D. (1962). *The life and Letters of Raja Rammohun Roy*, 3th, ed. by Biswas, D. K. & Ganguli, P. C., Calcutta: Sadharan Brahma Samaj, p. 270.
- (4) なお本稿は紙幅の関係上、卒業論文の構成を変更した簡略版である。
- (5) 竹内啓二 (1991) 『近代インド思想の源流：ラムモホン・ライの宗教・社会改革』新評論, p. 40.
- (6) 「サティール」の説明は、山崎利男「サティール」辛島昇ほか監修 (2002) 『新訂増補 南アジアを知る事典』平凡社, p. 283 から引用。
- (7) 山崎 (1974) p. 79, 80.
- (8) 白田雅之 (2013) 『近代ベンガルにおけるナショナリズムと聖性』東海大学出版会, pp. 138-144.
- (9) 中里成章 (1998) 「英領インドの形成」『ムガル帝国から英領インドへ』(世界の歴史 14) p. 355, 356.

- (10) 山崎 (1974) p. 127.
- (11) 以下、注釈では Kalidas Nag & Debajyoti Burman ed. (1947). *The English Works of Raja Rammohun Roy* を *Works* と記す。
- (12) *Works*, Part 3, p. 67.
- (13) *Works*, Part 3, p. 66, 67.
- (14) *Works*, Part 3, pp. 50-52.
- (15) *Works*, Part 3, pp. 83-85.
- (16) *Works*, Part 3, p. 84.
- (17) *Works*, Part 3, p. 81.
- (18) *Works*, Part 3, p. 85.
- (19) *Works*, Part 3, p. 81.
- (20) Collet (1962). p. 269.
- (21) ナタニエル・アレクサンダーについては、Ahmed, A. F. Salahuddin (1965). *Social Ideas and Social Change in Bengal 1818-1835*, Leiden: Brill Archive, p. 101, 102 を参照。
- (22) Collet (1962). p. 270.
- (23) 岡倉古志郎 (1944) 「インディゴ・プランターとライオット」『社会経済史学』14 (5), p. 31.
- (24) Collet (1962). p. 269.
- (25) Bhattacharya, S. (1975). "Indigo Planters, Ram Mohan Roy and the 1833 Charter Act", *Social Scientist*, Vol. 4, No. 3, p. 61.
- (26) Bhattacharya, S. (1975). p. 62.
- (27) マコーレー (1800-1859) はイギリスの政治家で、1834年にインド総督参事会の立法委員としてインドに赴任し、教育改革と刑法典の作成に尽力した。今井宏「マコーレー」下中直人編 (2007) 『世界大百科事典 (改訂新版)』『世界大百科事典』27 卷, p. 30. また、ベネディクト・アンダーソンは、マコーレーが完全なイギリス式の教育制度を導入することで、「血と色はインド人でも、好み、見解、道徳、知性においては英国人である階級」を創出することを目指していたと指摘し、マコーレーの教育制度を批判している。ベネディクト・アンダーソン (白石隆, 白石さや訳) (2007) 『定本 想像の共同体: ナショナリズムの起源と流行』(社会科学の冒険Ⅱ期 4) 書籍工房早山, p. 153, 154.
- (28) Bhattacharya, S. (1975). p. 63, 64.
- (29) 中里成章 (2018) 「過渡期のインド像: 19世紀中葉のカルカッタ知識人の故国を見る眼差し」『海と陸の織りなす世界史: 港市と内陸社会』春風社, pp. 262-266.

参考史料

Kalidas Nag & Debajyoti Burman ed. (1947). *The English Works of Raja Rammohun Roy*, Part 3, Calcutta: Sadharan Brahma Samaj.

参考文献

- ベネディクト・アンダーソン (白石隆, 白石さや訳) (2007) 『定本 想像の共同体: ナショナリズムの起源と流行』(社会科学の冒険Ⅱ期 4) 書籍工房早山
- 今井宏「マコーレー」下中直人編 (2007) 『世界大百科事典 (改訂新版)』27 卷, 平凡社, p. 30.
- 白田雅之 (2013) 『近代ベンガルにおけるナショナリズムと聖性』(東洋大学文学部叢書) 東海大学出版会
- 岡倉古志郎 (1944) 「インディゴ・プランターとライオット」『社会経済史学』14 (5), pp. 22-43.
- 小川道大 (2019) 『帝国後のインド: 近世的発展のなかの植民地化』名古屋大学出版会
- 神田さやこ (2017) 『塩とインド: 市場・商人・イギリス東インド会社』名古屋大学出版会

- 竹内啓二 (1991) 『近代インド思想の源流：ラムモホン・ライの宗教・社会改革』 新評論
- 中里成章 (1981) 「ベンガル藍一揆をめぐって (1)：イギリス植民地主義とベンガル農民」『東洋文化研究所紀要』 83, pp.61-151.
- 中里成章 (1990) 「藍と植民地支配：イギリスによるインド経済の再編成」『週刊朝日百科 世界の歴史』 97, pp. 562-566.
- 中里成章 (1998) 「英領インドの形成」『ムガル帝国から英領インドへ』 (世界の歴史 14) pp. 203-413.
- 中里成章 (1999) 「インドの植民地化問題・再考」『岩波講座 世界歴史 23』 pp. 155-179.
- 中里成章 (2018) 「過渡期のインド像：19 世紀中葉のカルカッタ知識人の故国を見る眼差し」『海と陸の織りなす世界史：港市と内陸社会』 春風社, pp. 261-281.
- 水島司 (2006) 「インド近世をどう理解するか」『歴史学研究』 821, pp. 49-59, 74.
- 山崎利男 (1974) 「ラームモハン＝ローイの司法制度論 (1)」『東洋文化研究所紀要』 64, pp. 77-177.
- 山崎利男「サティー」 辛島昇ほか監修 (2002) 『新訂増補 南アジアを知る事典』 平凡社, p. 283.
- Bhattacharya, S. (1975). "Indigo Planters, Ram Mohan Roy and the 1833 Charter Act", *Social Scientist*, Vol. 4, No. 3, pp. 56-65.
- Collet, S. D. (1962). *The life and Letters of Raja Rammohun Roy*, 3rd ed. by Biswas, D. K. & Ganguli, P. C., Calcutta: Sadharan Brahma Samaj.
- Majumdar, R. C. (1972). "The Date of the Birth of Raja Rammohan Roy", *On Rammohan Roy*, Calcutta: The Asiatic Society, pp. 3-18.
- Ahmed, A. F. Salahuddin (1965). *Social Ideas and Social Change in Bengal 1818-1835*, Leiden: Brill Archive, p. 101, 102.